

水牛通信

VOL.2 NO.7
毎月1回・10日発行
定価200円

人はたがやす 水牛はたがやす 稲は音もなく育つ

コラーージュ

韓国一九八〇年

栗津 潔

タイ東北部の声

楽譜

村からのノート 4

封建階級の生き残り諸君にもの申す

ジット・プミサック 6

ティーパゴンII ガウイー ガーンムアン

トンバイ・トンパウ 11

青森県「六ヶ所村」 馬場 仁 18

「ごえん玉」つて何だ 23

絵とき

バナナ植民地 24

フィリピン日記 福山敦夫 26

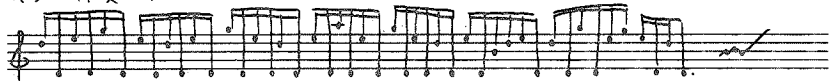
狂犬金斗煥を
追いだすことが
できなければ
われわれが
子孫に残す遺産は
かぎりない
抑圧と搾取のみで
あることを

韓国1980年

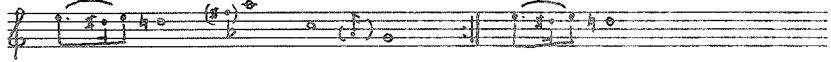
肝に銘じ、
われわれみな
闘争の線に、
立ちあがって、
愛国歌を
声の限り
歌いながら
前進しよう！

血の抗争の記録

ギター伴奏パターン



ブルース・ハーモニカ 前奏・間奏・後奏 (自由リズム)



ハ
おれの村だよ おれの村
昔から みんな住みなれたこの土地
守り神も 共に耐えてくれた
町の悪魔になやまされても
みんなでいっしょにくらしてきた

ハ
よみかきも 学校もしらさず
わき目もふらず はたらくだけさ
はたらくだけさ
森をひらき 風にさらされ
日にてりつけられ にげるすべなく
町の悪魔に 吸いとられる

ハ
今じゃ若者は いない
のこされた 老人子ども 死んだように
さびれた村 水牛もきえて
ひあがつた田 コメもない
町をうらむ このみじめさ
くるしみへらず 抑圧はつづく
夜も昼も 無数の村で

ブラサート・ジヤングムはこの詩をタイ東北部イサーンのことばでかいた。カラワン楽団はイサーンのことばでうたわれる歌をいくつかレパートリーにもっていた。

ブラサートはタマサート大学をでて、東北部コンケン県サプデーン村であたらしい村づくりの運動をおこした。ウィサー・カンタブとの共著「サブデーン詩集」、「水が空をひたし、魚が星を食う」をだした。

この「村からのノート」はその後、ダム建設で土地を追われる貧農をえがいた映画「トパン」の主題歌になった。

หมายเหตุจากหมู่บ้าน
mǎy hēt cǎak mǐi bān

村からのノート

詩 プラサート・ジヤングム
曲 カラワン楽団
訳 天野和子

00... mǐi bān haw kǎ khǎm mǐi bān haw kaw kee tǎy tēe kǎon yǐu kanmaa naan khǎw
ハ一 おれのむら だの おれのむら むらにむら じん屋すみ なれ

yǐu kanmaa naan yǐu yaom pay taam mǐi phǐi hǎan bǎo khǎy pǎak phǐi cǎak mǎy maan hǎa phǐi
たこのとま まりがみむらにたててくれ たまのあまにむら

間奏

hǎa bǎo khǎy wǎn rǎn yen kǎo phǎo yǐu ruam muu ruam maan
まこれても むらなでいっしょにくらしてきた

00... bǎo khǎy hǎn thǎy bǎo khǎy hǎn bǎo aan bǎo khǎn phǐan nǎk tēe rēng maan phǐan
ハ一 まりあむらむら ぶらむらむら むらむらむら ぶらむらむら ぶらむらむら

nǎk tēe rēng maan thǎy phǎy thǎy dǎy dǐn hǎa kin kap lom dēed tǎwan phǐed lom fǎn thon
さむらむら むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

間奏

yǐu bǎo khǎy nǐi phǐi mǎy maan khǎy sǔub con sǔup phǎm phǎak
まらむらむら むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

00... bǎd nǐi hǎn hǎn khon nǐm khon sǎaw khon thǎw yǐu hǎn dēk nǎy yǐu hǎn thǎk
ハ一 ぶらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

yaan man laan wan maan yǐu tēe khwaan taay khwaan hǎat wan hǎy saay saak sǎak naa khǎw
だ よらにむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

plaa khǎat khǐsen thǎn maan khǎy cay hǎy hǎn phǎy hǎn phǐat man út at anaathǎon man úk
めむらむら むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

ǎng bǎo thǎn thǎn thǎy yaan naan thǎy yaan wan thǎy sǐb maan thǎy sēn mǐi
あつはつづくよらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

封建社会の生き残り諸君にももの申す

ジッド・プミサック
天野和子訳

財宝 遠きものに非ず
賢き者 そを得ること易し
いずこたれども 道行きつくものを
されど怠け者 田得ることあたわじ

この詩は何世紀にもわたってタイ人が聞き慣れて来た箴言である。アユタヤ時代から現代にいたるまで、小さな子供から大人にいたるまでほとんどのタイ人は、ナライ王時代から流布して来た説教集「ジッタマニ」(珠玉)の中のこの一節を暗誦させられることによって、このように教え込まれて来たのだ。

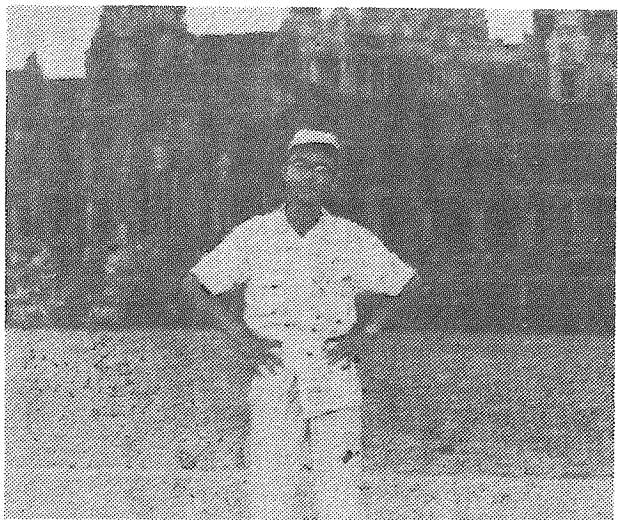
この詩を通り一べんに聞けば、人々に勤勉に労働にいそしむことを諭したもので、いつの時代にも通用する生活訓に違いない。しか

し別の視点から見れば、この詩は、金というものはどこにでもころがっていて賢くさえあれば人並み以上に豊かになれる、貧しくて食べていけないのは怠慢で働かないからであるという見方を植えつけて来た。この詩が教えて来た考え方こそ、貧困と欠乏の原因は怠慢であると多くの人々に信じさせて来た元凶である。「怠惰でないことがあろうか」ラームカムヘン大王すら、かの石碑でうたっている。タイはよきところ、「水あれば魚すみ、田あれば稲有り」、もし勤勉ならば二、三度網をうってみるがいい、必ずや大きな魚が漁れるだろう。種蒔きし田植えるところ今少し広げてみるがいい、香り高き新米を味わうことができるものを、奴らは生れついで怠け者、働きもしないで喰うものがない、あげくの果て人のせいだ……非常に多くの人間がこのように言う。これは封建時代以来の古い考え方が、

阿片のように脳をおかして来たせいだ。たとえば封建階級の代弁者、民主党の書記長スウットチャートは、東北地方の貧しい農民を臆面もなく「怠惰だ」と決めつけている。

去年のことだが、国会議員ソムサク・ソムブンサブは、東北地方の人間を、手を洗わないでものを食べる、不潔だ、と言ったことでもかなり物議をかもした。東北タイ人や経済の見地から現実を把握している者にとって、これを聞いた怒りがまださめやらぬうちに、民主封建党書記長スウットチャート議員先生が、社会的生産者たる民衆を怠惰ノ呼ばわりしてくれたことは「不敬罪」にも匹敵するものだ。さらに民主封建党主クアン・アパイウォン氏は同党書記長を弁護して、何が悪い、怠惰とは単に比喩的表現だとのたまわる。それならば抑圧された民衆、誰でもいいから誰か一人の顔を、犬、しかも飼主の恩を仇で返した犬にそっくりだと言ったところで、別に何も悪いことはあるまい、ただのたとえにすぎないのだから……まあこんなところか？

東北地方が自然災害にみまわれる度に、中央部への農民の流入現象が起る。そしてその度に、東北は飢えていないという騒々しい反発の聲が上るのだ。県によっては中央部より豊かだ。「水あれば魚すみ、田あれば稲有り」。乳飲み子を小脇にかかえて、仕事もしない。時折新聞が、東北地方は飢餓におそわれている、豚同様バナナの幹、ココロギ、カメレオン、虫まで食べている、と報道したことがあるが、その度に猛反撃を受ける。そんなことはあり得ない、タイは大きい、餓死などということは起こり得ない。奴らがカメレオンを食うのは、親子代々何世紀も前からそれが好きで食っているだけだ。



ジット・プミサック

食いが無くて食うわけではない。時折東北の農民は雨期に入ってからバンコクへ出て行く。去年がそうだった。東北問題にくわしい評論家氏によれば、彼らは博打をうちに来たのであって田植え時になれば農作業をするために戻って行くというのだ。全く奇妙ではないか。彼らが出て来たのは雨期であり、まさに田植え時である。田植え時が来れば自然に戻って行く、などという言い方から解釈す

れば、東北では干期に田植えをするとも思っているのか、
確かに誰でも怠惰な人間に、憎しみを感じる。働かずに、働いた人間から地代や利子、礼金を吸い上げるだけの怠惰な人間。人にあるまじき行為であり、奴らに食べさせるべきではない。勤勉と労働の尊さを説き、寝るべつて善良な民から利益を収奪することをいまして、国憲法では、「働かざる者食うべからず」と明記している。なんと公平ではないか。労働者のみ食う権利があり、幸福な生活を享受できる。ところがタイ社会の現状を見ているがいい。正反対である。労働する者は食べる物が無くて死にかかっており、ぜいたくに食っている連中は生産に一切たずさわっていない。彼らがしていることといえばせいぜい地代や利子をとりにたてるための計算か、高い収益をあげるため国内向け海外向けを問わず商品の独占を行うこと、そしてさらには働いても自分の手許にはほとんど何も残らない貧乏人を指して「怠惰」呼ばわりをすることぐらいのものである。さて、「水あれば魚すみ、田あれば稲有り」「タイは大きい、餓死などあり得ぬ、どうやって餓死などできるものか」と説く愚かな封建主義者諸君、先月タノム・ギティカチョン首相は自ら東北地方を公式に視察して回り、新聞の記者会見に応じた。彼は東北タイの人々が豚の餌同様、ぬかとバナナの幹をまぜて煮たものを食べており、栄養失調で子供を失った女にも出会ったと語っている。首相がこれ程はつきり認めたにもかかわらず、愚かな封建主義者諸君、まだラームカムヘン大王の八〇〇年も昔の石碑に依拠するおつもりか？ タノム首相が言ったことは嘘がどうか、ためしに討論してみられるといい。てん足の封建主義者諸君、是非試みていただきたい。

み込もうと待ちかまえている機械に自らの生命を犠牲として奉げ出さねばならない。ある者たちは道路工事の人手として一トン当りの掘り賃たったの三バツで働く。てん足の皆さん、一つやってみてごらんなさい。半ヤードも掘つたらあごを出すに決まっている。一体何にたとえたいのか。これでも彼らを怠惰だと言うのか。貝殻みたいな小さな足したてん足の皆さん、貴方がたは冬に寒い思いをしたことがあるか。東北地方の肌さす寒さを、貴方がたは御存知ない。温度のことを話しているのではない、降った雨が霜になる程の寒さのことを言っているのだ。今年の冬、バンコクは暑かったが、東北は例年通り寒かった。たとえばウドン県ノンブアラムプー郡のような山と山にはさまれた谷あいの地方の民のことを考えてみたまえ。どれ程寒いか。何に触れても手が痛む程で骨までしみるような寒さだというのに冬着も毛布も無しで耐えるのがどんなことか想像がおつきになるだろうか。彼らはどのようにしてこの寒さに耐えているのか。冬服はいくらでも売っている。ただそれを買う金が無いだけだ。一着八〇バツもするということは、彼らが耕して得たのみつき米約十五タン（一タンは約二〇リットル）を持って来てようやく一着買えるという勘定だ。十人家族とすると、米一五〇タン必要となる。それだけの米をどこから捻出できるというのだ。彼らの田の収穫量は少く自分たちの食べる分すら無いのだ。封建階級の諸君、彼らに職をさがしてやってみてはどうか。衣類や毛布を買うために彼らは朝から晩までせつせと働くに違いない。ごこえ死にした者などいるはずはない。

暇があったら東北地方の経済的現状を調査してみていただきたい。

愚かな封建主義者殿は目を閉じて念仏をとる如く、「東北人は怠け者」をくりかえす。思い出してみるがいい、現在バンコクでサムローを運転しているのが誰か。繊維工場やその他の工場で働いているのは誰か。あなた方が毎年地代を搾り取っている田で田植えする小作人は誰か。バンコク以外を見ても同じことだ。チョンプリンの地獄のような作業場で働く者は誰か。何百という製糖工場で働く者は誰か。南部の鉾山やゴム園で働く者は誰か。彼らの九〇％は東北人なのではないか。水浴どころではなく汗水たらして労働に従事する彼らを怠け者と呼ぶのか？

自分の生れ故郷を誰がすんで捨て去るものか。親子、兄弟、妻を残してあえて見知らぬ土地に行くことを誰が好むものか。東北人として、家を愛し、村を愛し、家族をいつくしむ心は同じ。しかし彼らは仕事を求めてその土地を去らねばならない。東北の地が彼らに提供する仕事がないからである。彼らの土地に稲は無い。干魃のため植えることができないのだ。水の中にも魚はいない。というよりそもそも水が無いのである。そこを動かずに居るということは餓死することに他ならない。毎日列を成して何万もの人々が他の地方や外国(ラオス)での生計の道を求めて移動して行く有様は、彼らが心から仕事を求めていることを十分証明しているではないか。生きのびて行くための労働をである。彼らが怠惰なら移動などする必要はない。そのまま寝そべって死を待つ方がましではないか。

干魃が来る度に破産した東北の農民たちは、蟻が砂糖に群がるように製糖工場に働きに集まって来る。彼らはすずめの涙ほどの労賃とひきかえに二〇時間も働かねばならない。時には、彼らの手足を呑

彼らに対する中傷誹謗がいわれのないものであることをその目と耳で確かめてほしい。我々の調査した一例をあげるだけでも十分よく分る。すなわち、ウドン県ノンブアラムプー郡バンノンタン村一つをとって見ても、二百余人の村民の中で冬着も毛布も持たない家族は四〇世帯に及ぶ。ウドン県全体で見れば一体どれ程の人間が寒さにふるえているか考えてみたまえ。

水が必要なのだ。彼らは生きて行くために田を作りたい。東北に仕事があれば、何も競ってバンコクへ出て来る必要は全く無い。ところが水が無い。仕事も無い。従って彼らは勤勉にも出て来る。のびした両手で一心に仕事を求めて、それにもかかわらず彼らは、不当にも「怠惰だ」と非難されるのだ。ああ、こんなことがあっていいものか。

このような極貧状態をかんがみれば、彼らに対するいかなる蔑みも非難も受け容れることはできない。東北の実情をよく調査して、問題を解決し彼らが自立できるようにするための長期的プロジェクトをたてる必要がある。タノム首相はこの面でも何らかの役割を果そうとしているようだが、封建階級は東北地方振興政策には何故か力を貸そうとはしないようだ。それどころか、全てを怠惰に帰着させるため太鼓を打ち鳴らしている。これは民衆の福祉に何ら責任を負おうとしない封建階級はるか昔から使い古して来た常套手段である。民衆が貧困に苦しむ時は、怠惰だからと唱え、自らは利益を収奪してやまない。

我々はこのように「無責任な」態度にがまんできない。従って封建的政治体制を打ち倒して民主主義体制をとった。ところがこの民

主義の時代と言われる今なお封建階級の残党が以前と変らぬ獅子の咆哮をあげている。人民は、彼らを蔑んでおいて、彼らの労働の代価を勝手気儘に横盗りする議員を欲してはいない。彼らの望むのは彼らの生活の安定をおびやかす問題を解決してくれる議員である。

怠惰の連呼とは別に、封建階級の中には、貧困の原因を一切、ピブソンクラム政権の政策のせいにしてしている者たちがある。たとえれば、彼らの週刊の新聞に載った「タイ人の負債」と題する評論によれば、利子が払えない、地代が払えない、従って村を出なければならぬという問題はピブソンクラム政権の乱脈を財政の結果である、と述べている。我々もこの政権の乱脈ぶりを認めるのにやぶさかではないが、彼らはすでに散り果て今は死骸も同然である。何故今さら死体をねらう「秃鷹」を演じなければならぬのか。過去の政権をこきおろすという方法は封建階級の人気を高めている。何故なら読んで痛快であり、すかつとさせてくれるからだ。しかしながらお尋ねしたい。それで何か少しでも問題が解決したのかどうか、封建的土地所有者の高利から民衆を解放することができたのかどうか、地代、礼金の搾取から彼らを解放することができたのかどうか。否、全く否。タイの社会を丸呑みにしようとしている「封建階級」自身から人民の目をそらすようとしていたではないか。彼らは気づいていないことはない。タイ人民の苦しみが過去の政権の悪政によることは部分的に真実である。しかしながら、高利、地代による搾取から起こる困窮の責任者はまさに自分たち封建階級であることを言い忘れては困る。封建階級のこの残存勢力を一掃しない限り、どのような政党が政権をとっても農民大衆の困窮を一掃する

ことは不可能だ。封建階級の本質は明らかである。怠惰やピブソンクラム政権を元凶にしたて太鼓打ち鳴らし、自らは一切責任をとらず、解決のための方策を考えてみもしない。

ラムカムヘン大王の言葉「水あれば魚すみ、田あれば稲あり」を唱えてさえば、タイが豊饒の地になるありがたい御言葉でもあるかのように思い込んではいけない。「タイは大きい。餓死などありえぬ」という七世王の言葉を王宮や諸侯の屋敷の外のタイ全土に通用すると思ひ込んではいならない。今現在、東北には水が無く、魚がおらず、田は干からびて稲は無い。犬だけでは無い、人間も餓死しているのだ！

水あれば魚すみ、田あれば稲あり、という豊かな地にするにはどうしたらいいのか。豊かになってもまだ、ただすわって食べ物が口に入ってくるのを待つだけの怠け者がいたらそれこそ「怠惰」と非難するがいい。

封建階級が真に人民に仕えようと言われるなら、人民を中傷するのをやめたまえ。過去の政府の遺骸を秃鷹のようにあさるのをやめたまえ。長期的な経済計画をたて、工業をおこし、不平等条約を廃棄し、封建的搾取制度をなくすことを考えてみてはどうか。そうすれば選挙の投票日には封建党に一票を投ずるよう誰にでも推選してさしあげようではありませんか！

テイーパーゴン＝ガウイーガーラムアン

トンバイ・トンパウ

天野和子訳

彼と初めて知りあったのはずっと以前、私がまだ新聞社に勤めていた頃のことだ。その頃彼はチュラロンコン大学学生会誌の編集責任者としてすでにその名を轟かせていた。それは彼の思想が、彼と同世代の人間又は彼より年輩でありながら思想的には彼より遅れていた人々よりはるかに先行していたからに他ならない。それに対して彼が受けた褒賞は、彼の思想に共鳴しない者達に襲いかかられ、「大学の講座の壇上より」投げ飛だされるということだった。その後大学当局は彼を訊問し、退学処分にした。

程なく彼は、「タイ・マイ」紙の編集部で働くことになった。当時、編集長はタウイン・ウイチアンチュム、編集顧問にはスパーク・シリマノンがいた。私はといえば、まだかけ出しの記者で活字の校正、すなわち現在では編集部校閲課と呼ばれるところに配属されていた。彼の書くものは尖鋭でかつ説得力があった。とくに彼の思想は、彼の同世代人の想像の範囲をはるかに超えて進んでいた。彼はタイ・

マイにはさほど長くいなかった。というのは復学が許されて大学にもどったからである。学部課程を終了して文学士として卒業した後、ペトプリ・ピタヤロンユン教員養成学校の教師として赴任した。当時彼は友人のステイター・クブターラック、プラウッティ・シーマントラ、ピニット・ナンタウイジャンたちと彼ら新青年の新聞、「シアン・ニシット」(学生の声)を発刊して文芸界に新思想を吹きこんだのである。

その他にも彼は当時の有名な新聞のいくつかに作品を発表していた。たとえば「サーン・セーリー」には「生きるための芸術」「人民のための芸術」が掲載されたが、これによってテイーパーゴンは世に出たのである。「ニティサート」(法学)など学術雑誌にも彼は書いていたが、とくに「ニティサート」二五〇〇年特集号の重要な内容を形作ったのは、ソムチャイ・プリチャーヤルンの論文だった。

彼の本名は、誰もが呼ぶように「ジット・プミサク」である。私が

言及した名前、ジット・プミサク、ティーバゴン、ソムチャイ・プリーチャイ・ジャルン、ガウイー・ガーンムアン等々は、どの名も例外なく「封建階級が憎悪し、帝国主義者が恐れ戦」いた名前である。

彼がタイ・マイ社を辞めた時に、私は再び彼と会うことになることは想像していなかった。あにはからんや一九五八年十月二十一日からほどなくして我々は再会したのである。ただし今度は事務机の前にしてではなく、牢獄の檻の中でであった。

「おい、バイ（トンバイ氏の通称）こっちへ来いよ。」大声で私を呼ぶ声がする。折しも、身の回り品一式をぶら下げた私は、警官に伴われて公安警察の捜索課から拘置課の監禁房にやって来たところだった。

私には声の主が誰なのかすぐ分った。「よお、ジットじゃないか。」私はふりかえりざま呼びかけた。

「ここへ来いよ。俺達はみんなここにいろぞ。」よく通る声で彼は叫んだ。

私は何のためらいもなく所持品をぶら下げて声のする方へ向った。警察官にこの房に入りたい旨申し出ると、彼は私の希望通り鍵を開けてくれたので、さっそく中へ入った私は、彼がここへ来ることになったいきさつを訊ねたのである。

「例の十月二十一日以来さ。」彼は答えた。「いつになったら君が来るのか、ずっと待っていたところだ。なんでこんなに遅れたのかい。」まるで避暑に行く話でもしているような調子で彼は訊いたものだ。

「仲間がどのくらい集まるか様子を見てたのさ。一人じゃ寂しいからな。」私の答に彼は笑った。

の一件により反共法違反及び王国内外において治安を乱した科によって告発され法廷に立つ。国防省軍事法廷は、一九六四年、六年余にわたる身柄拘禁の後彼に無罪を言いわし釈放した。

彼は不当と妥協するということが無かったが故に、ラートヤウ監獄に収監されるまでも度々獄を移されることになった。パトムワン拘置所からプラムサムヨート拘置所、そしてまたパトムワンへ。そして最終的には、ラートヤウ監獄へ移される最初のグループに入れられた。ラートヤウへ行ってから彼は、人に託して次のような手紙を私に届けて来た。

親愛なる友、

この手紙と共に我々が「タイヤカレー」と呼んでいるカレーと、塩魚との見本を御覧にしたいと思います。

我々の食事がいかなるものかとくと観察されたし。いざれ賞味されることと、御覚悟のほどを。 ジット

彼の警告の手紙と「タイヤカレー」の見本、そして身よりも小骨ばかり多くやたら塩辛い「塩魚」の見本とは、これから私達がどのような食生活をとれば、この事態をのりきることができるか考えさせずにはおかなかつた。そしてこれが「相互扶助」の原則に基づいて共同組合を真似て、食事を共同するという考えを生み出すきっかけとなった。これは当時、私達のおかれた状況下では最良の解決策だった。私達はこれを「コミュニティ」と呼んでいたのだが、実際は相互扶助によって食生活を共同化したというだけのこと、厳密な意味では「コミュニティ」に至ってはいない（但しこの本の中では私達の

「アイランもここにいろぞ。」彼がアイランと呼んだのは、ステイ・クプターラックのことだ。

「それじゃアイ先生は」と私は訊ねた。

「彼は取調べ室にいろ。」アイ先生とはブラウツティ・シーマンラのことで、彼は教師をしていたのでこう呼ばれていた。教えるのがうまく、博学で、何か分らないことがあると彼に聞けば分ったので、私たちは彼をよく「先生」と呼んだのだ。時々「アイランヤイ」すなわちステイに対して彼を「アイランノイ」とも呼んだものだ。

彼とステイとは私を手伝って、今まで人が入っていないかったため埃だらけだった私の房を掃除して寝られるようにした後、逮捕された時の模様や訊問のことなど話してくれた。ジット・プミサクに対する取調べは非常に厳しかったため獄内に知れわたっていた。それは彼が警察の取調官に対し決してへり下った態度をとらなかつたためである。彼は答えたことと、調書に書かれる内容が違っていることを決して許さなかつた。従って激しい口論になった。ジットが陳述することを、取調官は記録しようとしなかつた。何故なら彼の意図した項目に当てはまらないからだ。彼はそれを許さなかつた。断固として自分の陳述通り記録させたのだ。彼によると、彼の取調べに当たった係官は元刑事犯の担当だったため、刑事犯の訊問を行う調子で政治犯の訊問に当たったため、ことごとくぶつかりあい、遂にその取調官を交替させるに至った、という。

彼が訊問された内容は、以前彼が書いたもので、学生時代すでに事情聴取され、そのことによって壇上から投げ落された、例の一件を再び持ち出して来たものだ、と彼は語ってくれた。その後彼はこ

以前の習慣に従って「コミュニティ」と呼ぶことにする。

彼は私よりも大分先にラートヤウ監獄に送られた。ラートヤウ入りしたごく最初のグループだったといえる。彼の少し前に、地方から逮捕連行されて来た人達、とくにテップ・チョーティヌチットと共に告発されたシーサケート県の農民たちがラートヤウ送りになっていた（実際は彼らはテップ・チョーティヌチットより一年も後で逮捕されたのだが、警察はこの六一人を彼の共犯者として起訴する）。この人達の他に、元国会議員で社会主義戦線副議長をつとめたハイドパーク運動党首タウィーサク・トリブリーなどもすでにいた。

私がラートヤクに着いた時は、以前と同様ジットと彼の仲間たちが暖く迎えてくれた。悲しみや絶望とは縁の無い、いつもの彼一流の笑顔で。彼はいつもにこやかでそしていつも闊志にあふれていた。昂然と、そして後退することなく。恐れとか絶望という言葉は彼の脳裏には皆無だった。彼はきわだった秀才であったばかりでなく、その胸のうちには、資本家や封建階級、帝国主義者の皆を一瞬のうちに粉砕してしまうようなダイナマイトをかかえていた。誰もが彼を過激派と呼んだ。ある者たちは、ならず者とすら言った。それは彼が不正との闘いにおいて決して妥協したり屈服したりすることがなかつたからである。

私がジットを誰にも増して羨しいと思ったことが一つある（私は小さい頃から孤児だった。それは彼には最高の母と姉がいたことだった。母セングン・プミサク、姉ピロム・プミサクとは、私がかつて出会った最も素晴らしい母と姉である。私達も彼にならつて「お母さん」、「お姉さん」と呼び、そして実際そう思ったのである。私はジッ

トの人となりがかくあったこともなるほどと頷けた。彼を鍛えたのは母と姉という最良の黨だったのだ(私は彼とつきあっている間に一度も彼の父親についての話を聞いたことがない。私もあえて訊ねてみなかったため、今でも彼の父のことは分らないままである)。彼は小さい時から母と姉とのいつくしみのもとで生まれ、彼の母はジットとその姉とを女手一つで育て、最高学府にまで送ったのだ(彼の姉は薬学を専攻し、スカラシップを得て海外に研修に出たこともある)。彼は以前地方にいたことがあると話していた。プラケンブリ県やカンボジアである。彼はカンボジア語が非常に上手かった(とくに彼の筆跡は玄人はだして、ヤン〔特殊な書体で密教的呪文などを書いた護符〕を書かせたら十分売物になる程みごとだった)。ピマイの石碑を解説して現代語に書き著したのは他でもない彼、ジットである(一九四二年頃の芸術局の文学雑誌をひもとけばみつける筈である)。当時石碑を解説できる人間がほとんどいなかった頃、である。彼はホーモク〔バナナの葉で包んだ食物〕売りや、ガイドのアルバイトをしたこともある。とくにアンコールワットは、目をつぶったままでも案内できたくらいという。

彼は文学と歴史学に抜き込んだ才能を持っていたが、同時にいろいろなタイプの楽器を弾いた。とくに「ジャケ」〔ギターに似た弦楽器〕と呼ばれる楽器を、彼はラートヤウにまで伴っていた。食事の後や休み時間によく楽しそうにジャケを弾いていたものだった。彼がその音色の美しさに恍惚としていたのだと考えるのは早計で、弾きながら曲を考えていたのである。後で分ったことだが、彼は作詩と作曲を別々にしていた。従って彼が弾いていたのは、ほとんど

彼がエゴイストで、自分だけ生きのびようとすれば、彼程素晴らしい母親と姉がいたなら、ラートヤウ監獄よりもっとひどい所ででもなんとか居心地よく過せた筈である。何故なら彼の母と姉とは、彼が不自由しないようにいつも差入れに来てくれたのだから(ジットは胃病の持病があり、また彼は、彼の姉にとっては唯一人の弟、母にとつては唯一人の息子だった。けれどもジットは一人で食べて、楽しみを独占するというようなことは決してしなかった)。

彼は学究の徒であった。ラートヤウに在る間にも彼は沢山の作品を残した。私は彼が翻訳したゴリキの「母」の原稿を見せてもらったことがある。彼はそれを全部訳し終えていて、その訳文は胸を打つ立派なものだった。彼はまたインドの文学、「慟哭する大地」や「インドの母」を訳し終えていた他、少なからぬ数の詩及び私が「ラートヤウの歌」と呼んでいる一連の歌もこの間に書かれたものである。私にとつてこれらの歌は、私の人生の一部を歌ったものであり、珠玉の価値がある。この他にも彼は研究論文をいくつも書き残したのだが、彼がそれらをどこへ持って行ったのか分らないままである。何故ならジットは私より二年早く釈放され、その後私は彼と再び会うことはなかったからである。

プラチャティパタイ紙の読者なら、一九六三年又は六四年頃の紙面に載ったラタナゴーン遊詩調で書かれた「ガウイーガーンムアン」の有名な詩を覚えておられるかも知れない。この詩はその後雑誌や本、タマサート大学刊行の「ニティサート」のような学術誌も含め、たびたび印刷されたものであるが、これもまた彼、ジット・プミサクの作品である。

の場合ででき上った詩に曲をつけて何度もおしながら練習していたのだ。彼の作った歌はどれも、私達に目標をもって力強く前進することを呼びかけたものである。

彼はラートヤウの「学生グループ」や「青年グループ」のリーダーだった。思想上はもろろん、「コミュニン」のための「労働や活動の面でも彼は誰よりも献身的に運動をリードした。それは私達がラートヤウに移つて、食事を共にすることを決定した時のことである。すなわち金を出しあつて食料を生産し、食生活を共同化したのだ。もつと易しく言いかえれば、持てる者が出して持たざる者を扶け、ひとしく食べられるようにしたのである。持てる者とは、バンコクの間で親類縁者が近くにおり、なにがしかの金品を提供できる立場にあつた者たちのことであり、持たざる者とは地方の人間、すなわちほとんどの場合貧しい農民たちだった。彼らは貧しいばかりか、シーサケート、スリン、ナコンシータマラート、ソンラク、ハトヤイなど遠隔地から来ていた。ある者は家族からの送金があつたが、全くない者も多かった。外に残された家族たち自身の食いぶちすら満足に確保できない状態だったからである。一年を通じてただの一度も家族の面会を受けない者もいた。どうして来られよう、はるばるやつて来る汽車賃も船賃もないというのに。

ジットは他人の苦しみを自分の痛みとして感じるタイプの人間だったから、金銭、労働、頭脳の全てを提供して全身全霊で「コミュニン」に奉仕した。私は彼が「青年の模範」だったと考えている。働くこと、学ぶこと、民衆に仕えること、における彼の勤勉さ、そして思想、行動、闘争における彼の果敢さによって、実際のところ、

コミュニンの活動では、彼は生産隊を志願した。生産隊というのは、畑を作り様々な野菜を植えるのが任務である。彼らの作つた野菜は毎日台所へ運ばれて一〇〇人の人間を養つたばかりでなく、売りに出されて月々数百パーツの資金をコミュニンにもたらした。私は終始一貫して彼と共に働いていた上、コミュニンの事務局の書記で、全ての活動の世話人という立場でもあつたため、誰が何をどのようにしているかについて把握していた。従つて私は、コミュニンの活動的部分と当然にも親しかつたわけだが、とくにジットと彼の生産隊は誠心誠意労働に励んだグループだった。彼らと私は、共に肥桶をかつぎ畑にこやしをやり、烈しい雨で野菜が水びたしになる時は、畝から水をかき出すのに精を出したものだ。放っておけば洪水になり野菜は全滅してしまうからだ。時には雨が一日中降り続け、私達もまた一日中水をかき出す作業に奮闘したこともあつた。みごとに育っている野菜が水をかぶつてみすみすダメになってしまうのは耐え難いことだった。ようやく水をかき出し終つて一息つかつかないうちに、またどしゃ降りになった時などは全く泣きたい気分だった。もう一度始めからやりなおしだった。ラートヤウのインテリたちの中で、「背中中空と闘い、顔で泥と闘う」〔炎天下田んぼで働く農民の労働を表現したタイのいいまわし〕人間は彼唯一人だったことを私は確信をもって申し上げる。彼程骨身をおしませず働き、またその成果をあげた人を、私は他に知らない。

畑作りの他に蛋白質の不足を補うため、私たちは池を掘つて魚の養殖を始めた。ここでも彼は私達の重要な戦力だった。魚を育てて大きくし最終的にはそれを手づかまえる仕事である。飢えたこと

のない人間は、飢餓がどういふものであるか想像がつかないに違いない。私達が監獄から受けとる食費は、一日に二食分として二バーツ九四サタンにすぎず、米代だけで二バーツかかり、副食費は一バーツに満たない、という勘定だった。これで一体どんなものが食べられたか想像していただきたい。すなわち死なない程度に生かしておけばいいわけであり、それには「飯つぶ」すら与えておけばよかったのである。当局の基本方針は、牢獄は快適に住むところではなく罰を受けた人間が懲りて改心するべき所であり、生かしておくに足る程に食べさせておけばいいのであって、満腹することなど望むべくもなかった。彼らは食事がよく快適に過ごせたら牢獄が満員の盛況になってしまふと考えていたくらいである（その上タイの監獄にはまだ差別が残っていた。タイ人の囚人には植民地現地人の標準を適用するというので、食費は非常に低くおさえられ、何十年もそのままだった。生活必需品の価格はその間に次第に値上がりしたにもかかわらずである。一方外国人、とくに白人の囚人にはタイ人より高い食費が支払われていた。我が国の監獄の体系は、白人の囚人をタイ人の囚人より一段高く見做していたのである。それが人道的だということにより白人は白人のレベルでの洋食が提供されていた）。

この食事の問題は、ウトン・ボンラグンが一度改善の要望書を提出したが私が釈放されるまでに遂に解答はなかった。従つて我々は自分たちの生命は自分たちで守らねばならなかった。読者の皆さんが当時ラトヤウをのぞいて見たならば、ジットと彼の「若者グループ」が、堀の水に首だけ出したり潜つたりして、魚を獲つたり、かにやかえるをつかまえている有様を目撃したことだろ

だ。時々彼は彼と彼の仲間の著者たちが一緒になつて彼が作詩、作曲した歌を練習していることもあった。

彼は音楽的才能にめぐまれていたのみでなく、学習する能力、教育する能力においても並はずれて優秀だった。彼はその頃中国人から中国語を習っていたのだが、習得の早さと正確さは類稀れなもので、教えていた人が「彼の発音は生粋の中国人よりまだ正確なくらいですよ」と、驚きをおぼえなかった。もう一つ私の心に焼きついていることがある。当時、私達と同様ラトヤウに収監されていた者達の中に、ムーサー族の年よりと若者がいた。彼らはタイ語が話せなかったのでも啞同然で、一語一語を絞り出すように語る様は、山中で鉱脈を捜し当てるよりさらに困難な風だった。そんな彼らとつきあつて最も親しくなつたのはジットであり、その成果を彼はタイ語とムーサー語の辞書にまとめ始めていた。けれどもこの二人のムーサー族は彼の辞書が完成するのを待たず、釈放されて帰つて行つた。辞書は完成しなかったとはいえ、彼らは監獄を出た後は、それ以前は全く解さなかったタイ文字をなんとか読んだり書いたりできるように上話すこともできるようになつたのだ。彼らの啞を治した人は他ならぬジット・プミサクなのである。

ジットは政治的には革新であり、自らの思想に確信を持っておりまた主義に殉じるタイプの人間だった。彼の政治思想は確固としたものでありかつ正しかった。間違つた考え方と妥協しようとはせず、粉碎するまで手をゆるめなかった。資本主義、封建主義、帝国主義、彼は心底憎悪した。ラトヤウの中には、日和見主義、温情期待論、事なかれ主義が少なからず横行していたので、ジットを好まない人

う。これらの収穫はみな私達の食膳に上つた。大した量がとれない時でも少くともナムブリック（魚や唐がらし等をねって作るタレ）の材料となり、私達の菜園でとれた新鮮な野菜につけて賞味することができたのである。彼らの労働の成果は私達に野菜や魚を供給してくれたばかりか、その後あひるや鶏の卵や肉までも分配することができるようになつたのである。これらは私達が（監獄当局及び内務省矯正局との）闘いを重ねて克ちとつた権利であり、また献身的労働の成果でもあった。

ジットの普段の服装は、黒い半ズボンにバカマを胴に巻いただけのもので、外に出て働く時にはズボンの裾をたくし上げ、バカマは日よけのため頭に巻いていたものだ。上半身は何も着ていないことが多かったため、強い日ざしと雨との中で労働の結果、筋肉質でかつ皮膚は赤銅か鉄のような色になっていた。それは細身ではあつたがたくましいものだった。服を着る必要のある時には、中国風のグイヘンか紺色の農民服（北タイのモトホーム）を着ているのが常だった。彼が白いワイシャツを着て長ズボンをはいたのは出廷する時だけだった。

私達が運動のためにいたスポーツには彼もほとんど何でも参加した。ただしほどほどにという程度で。彼の身体はあまり無理することができなかつたからと思う。彼はバレーボールや蹴鞠に興じたが、バドミントンとバスケットボールは好まなかつた。その他サバートイやボーリングをすることもあつた。しかしながら彼の日常は、生産隊員としての労働の他は研究と著述にそのほとんどを費していたといえる。毎日私達は彼の弾くジャケの調べを聞いたもの

間も多かつた。この連中はジットの才能や鋭さを気味いして、頑固者、ならず者その他ありとあらゆる悪口を言つた。それというのもジットが、あらゆる不義、あらゆる特権、あらゆる不正に対し、生命がけで闘う人間だつたからに他ならない。

獄内での待遇改善運動や、様々な不正に対する抗議、裁判を要求する闘争等においてもジットは憶することなく我々と共にそれを推進した。遂に彼が軍事法廷に立たされた時には、私達弁護士グループは彼に多少の法律知識を伝授したにすぎないのであるが、彼は被告として、大学で法学を専攻し職業柄法律援用のエキスパートである軍事法廷の検事や、証人として出廷した行政の内情に通じた陸軍や警察軍の高級将校と立ち向ひ、彼らと彼らの策謀を易々と打ち負かしてしまつた。検事や他の専門家たちですら彼の法廷での闘いぶりには兜をぬぎ、本職の弁護士でもかなうまいと述べた程である。私も彼の裁判を傍聴した一人であるが、彼が法律を学び弁護士になつたと思ったら、彼の右に出る者がいない程すぐれた弁護士になるだろうと思つたことだ。彼が自分で自分を弁護したこの裁判で彼は勝利した。国防省軍事法廷は公訴を棄却し、一九六四年、六年余の拘禁の後彼を釈放したのである。

彼は天才だった、と私は思う。両親にとっては誇るべき息子、友人にとっては敬愛すべき友、ジット・プミサク、ティーパーゴン、ソムチャイ、プリチャー・ジャルン、ガウイー・ガーンムアン、どの名でもあろうとも。

「ジット・プミサク」——戦闘的タイ詩人——（鹿砦社刊）より転載
鹿砦社 千代田区神田駿河台3の1 ☎（293）9821

青森県「六ヶ所村」

馬場 仁

「だいたい馬場の感想が多すぎるね。ルポだったら『時間がないので』なんていいわけめいた文章は除くべきだし、その他の結果についても最初から決めつけすぎてるね」

「中途半端な表現はやめるべきだ。この本の革新性をどこに求めるかが問われているのに、この文章には何も新しいものがない。つまりそれは著者自身に革新性がないからなんだよ」

「結論づけが概念的で甘いんじゃないの。被害者論も単純すぎるし、著者の視点がこのままでは自主制作の意味がないと思うね」

一九七九年九月二十九日、東京、東中野にある私たちの共同事務所（J・P・ユニオン写真事務所）で行なわれた写真集「六ヶ所村」制作例会で、私は言われ放題だった。私が書きあげた本文原稿の第二稿が全然面白くないという。出席してくれた六人の友人たちと四時間半の討論をした結果、結局原稿は全面的に再び書き直しと決っ

てしまった。

八年前の一九七二年から通ってきた青森県六ヶ所村のことを本にすることが決ったのは、七七年九月だった。「開発」の中で生きている村の人びとの記録をまとめたという私の希望で、共同事務所の出版部（J・P・U出版）が自主出版することになったのだ。事務所の自主制作は七七年六月に出版された島田興生写真記録集「ピキニ・マーシャル人被曝者の証言」に続く二号目だった。その後、集中的な二年間の撮影が終り、具体的な編集に入ったのは昨年の九月。以来毎週一、二回の制作例会が続けられてきた。

編集会議の原則は、各スタッフが自分の関わりに責任を持つ以上、言いたいことは遠慮なく発言することだった。おかげで初回の例会では冒頭のような発言が続出、ひたすら開発の反住民性を告発したいと主張する私に対し「観念的だ」「視点が甘い」と批判が集

した。しまいにはドサクサにまぎれて「単細胞」「マイホーム主義者」などと、批判を通りこした？発言も出るしまつ。本の構成案も二転、三転して、結局私と村との関わりを素直に出すため日記形式にすることに決った。はじめは「日記」にすることにこだわり続けていた私がそれに従うことにしたのは、ふつうのルポではあまり書かれることのない書く側（この場合は私）の取材生活をも含めて語った方が、より村との関わりを理解してもらええると思ったためだった。だが、実際にやってみると、日記を書くのは難しいことだった。日々のな

にげない言葉使いや人との対応の中に、自分の人間性がもろに現われてしまうのだ。これが恐ろしくなるためには、腰を据えてかなりの枚数を書かねばだめだった。それでもまだ、日記というのは恐ろしいと思っている。そして編集作業の大半を終えたいま、私の気持には、村の人びとの生きかたを伝えるという行為のもつ責任の重さが、どっしりとのしかかってきている。

★ ★ ★
青森県六ヶ所村は下北半島の太平洋側のつけ根に位置する小さな村だ。人口約一万人。冷たい偏東風と出稼ぎが多いことは、いままも変わらない。

はじめて村を訪ねたのは、一九七二年の八月だった。私がこの村に来るきっかけを作ったのは、その四ヶ月前に沖繩、平安座島で受けたひとつの印象なのだった。当時、先輩カメラマンの一人と「本土復帰」直前の沖繩に撮影のため滞在していた私は彼の紹介で本島東部の平安座島にあるガルフ石油の集合煙突に登れることになった。そのころ平安座の人びとは、すでに島の大部分の土地をガルフに譲り渡していた。外資系資本の石油やアルミなどのコンビナート建設が、現地できまざまな問題をひき起こしていることを知っていた私は、その現場を見る良い機会だと思ひ、喜んで煙突に登った。地上百数十層の高さから見た光景は、いまでも良く覚えてる。整然と並んだ巨大な石油タンク、銀色に輝く精製装置や数えきれないほどのパイプライン、そしてそれらの間を見え隠れする豆粒ほどの作業員の姿。島は、全体がまさに巨大な石油コンビナートなのだった。



開発の水ガメとなる小川原湖。淡水化されると生活できないと漁師たちは不安がる。

1979. 11

それは南国の太陽を受けて、実にメカニカルな美しさを放っていた。私は夢中で写真を撮った。

だが、私が石油基地から受けた明かるい印象は、島の反対側にある住民の部落を訪れた時、完全に消されてしまった。百軒にも足りないその部落は、ガルフに土地を明け渡して先祖の墓まで移転させた島の人たちのものだった。ひっそりと静まりかえった家々から漂ってきた雰囲気は、陰湿で暗かった。私は、この部落全体がなにか影のようなもので覆われているような気がした。土地と引きかえに多額の補償金が入ったはずの部落から、なぜこも暗い雰囲気が漂ってくるのか。それは石油基地で受けた明かるい雰囲気と重なって強く私の心に残り、東京に戻ってから消えなかった。あの部落で受けた暗い印象は、いったいなんなのか。それは決して論理的なものではなかったのだが、私の漠然とした問題意識とともに日毎に強い印象となっていた。私は、できるなら平安座島の開発とそこに住む人びとの暮らしを追ってみたいと思った。だが、当時フジテレビ社会教養部の契約カメラマンとなったばかりの私には、それはできないことだった。そんな個人的事情と、自分なりの問題意識がぶつかって私は多少のうしろめたさを感じながら、別の開発現場を探し始めた。

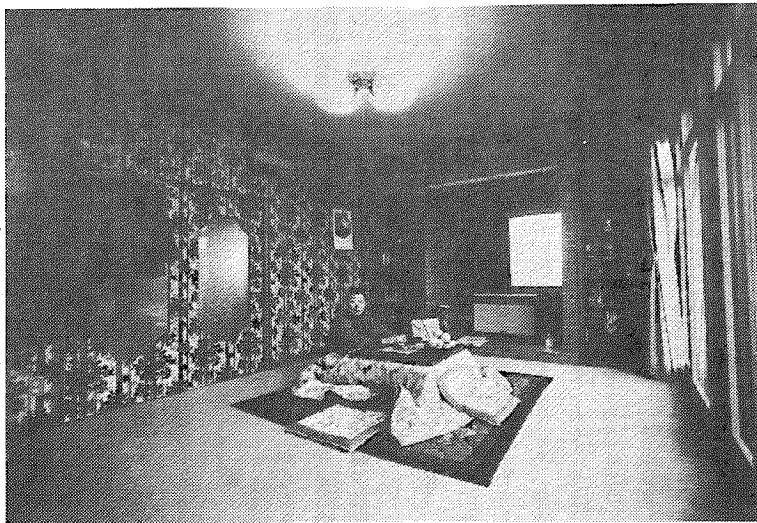
「六ヶ所村で土地ブーム・開発野獣の犠牲者続出」という見出しを、中央紙の社会面に見つけたのは、それから間もなくだった。新全総の候補地として名前が知られ始めたこの村のことは、新聞記事などで知ってはいた。しかし、この時まで行く気になったことはなかった。私はすぐこの村に行ってみることにした。その年の八月、私は一人で村に向かった。

で村に向かった。

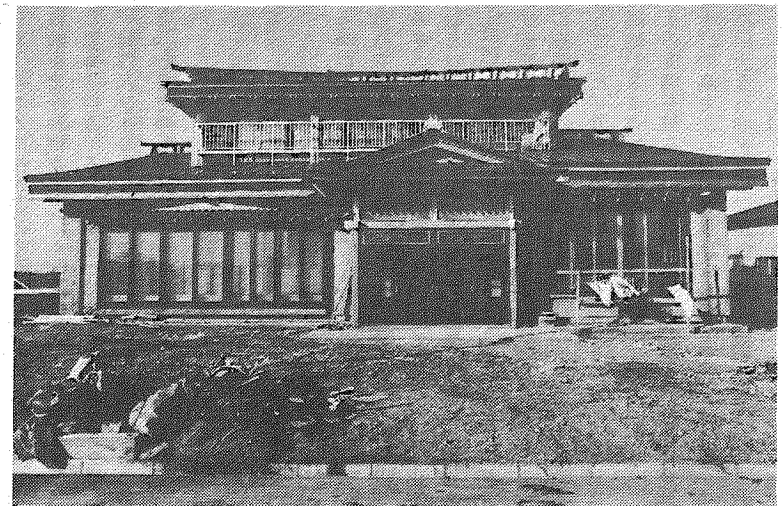
最初に村で出会ったのは、当時、村長の寺下力三郎さんを先頭にした反対運動だった。私はこれを追って、開発の反住民性を告発しようと試みた。だが、何度か反対集会に通ってみるうちにそこで叫ばれる参加者のスローガンが実に空しくきこえてくるようになった。反面、開拓地などで会った土地を手放した農家の人たちの話には、実にその生活を反映したリアリティがあるのだった。私は最初敵対視していた開発賛成派の人びと、特に開拓農家の人たちを追い続けた。それは私にとって苦しい仕事だった。最初、反対運動を追っていた関係上、土地を売った人々には、私はなんの人脉的つながりもないのだった。特に新住区と呼ばれる移転地に移り住んだ「元農民」たちから話をきく作業は、スパイ呼ばわりされる中で進行了た。

一九七八年十月二十八日（土）

夜、新住区の佐藤信一さん宅を訪ねる。ちょうど佐藤さんの帰りと玄関先でぶつかってしまった。彼はトラックの助手席から降りてきた。かなり酒くさい。相当飲んでいるようなので心配だったが訪ねた目的を話した。とたんに「駄目だ。駄目だ。お前、県の手先だろ。まだまだまずまえ。新聞社でも何でも駄目だ。私なんにもしやべらねえ。だれにも会わねえ」という答えが返ってきた。そしてさつさと家の奥に消えてしまおうとする。「県の手先」と思われたので



いまだ職がなく、朝起きると今日一日何をしたら良いのか考えるのが苦痛だという。



新住区に移転した元開拓農家
1980. 3

はたまらないから、玄関先でねばる。「ねえ、佐藤さん。お願いしますよ。僕は県とは関係ないんだしね。新納屋時代のことを話してもらえばいいんで、十五分でもなんとかして下さいよ」こんな調子で二十分ほど玄関に立っていたら、彼はいったん入った奥から戻ってきた。「おめえら、嘘ばかり書くから駄目だ。おめえ、どこの新聞社だ」という。私が新聞記者じゃないということと「そんなじゃあ、あがれや」といって、中に入れてくれた。この間三十分。諦めないでよかった。酒が入っている気分なのに、悪いと思ったが話をきかせてもらうことにした。酔も手伝ったのだろう。私が新住区の人の話を記録しているという、喋りにしゃべってくれた。かなり不満がたまっていた感じだ。「二時間ほど話をきいて、家族の写真を撮った最後に「私のいったこと、雑誌書きにくるなら金出すぞ」といわれたのにはまいてしまった。(馬場仁写真日記「六ヶ所村」本文より)

★

★

★

村に通いはじめて八年たった。いま、一九八〇年の夏をむかえて村は大きな変貌をとげようとしている。開発関連事業として次々と整備された村内の道路、立派に建てかえられた公共施設群。村内の子弟を対象にした県立高校が開校したおかげで、村の進学率は一段と高くなった。確かにこういった村の外観だけを見ると、開発はまさに恩恵をもたらしているかと思えてしまう。私を県の手先とか反対派のスパイ呼ばわりした移転者たちの家も、百坪近い立派なものだった。だが、土地買収に応じ農地を手放してしまった彼らの

暮しは、その外観とは反対に惨めなものだ。農業という生活の根を失った彼らの多くは、あいも変わらず日雇いや出稼ぎ生活を続けなければ、その生活を維持してゆけないのだった。そんな彼らの暮しこそ、私が平安座島の部落から受けた暗い印象の実態だったのだ。平安座の部落に漂っていた暗い雰囲気は、住み続けた土地を手放し、生活の基盤を失った人たちの暮しからしみ出た暗い影だったのだ。私はいま、それと同質の印象を六ヶ所村の新住区から受けることができる。

★

★

★

六ヶ所村も含めて、巨大開発の記事がマスコミから姿を消して久しい。青森県が当初ぶちあげた「むつ小川原巨大開発計画」も、あいつぐ石油ショックや不況で、いまや単なる石油備蓄基地に終わろうとしている。この間、無責任な県や村の行政におどらされて、多くの農民がその土地を手放し離農して去った。だが、私は現在でも開発予定地内に、崩壊してない農民の暮しを見ることが出来る。開発決定以来、いまだに土地買収に応じず、自分の暮しを守り続けてきた少数の人びと。「開発」という困難な状況の中でも、確実に営まれ続ける彼らの暮し。私は、このなんの変りもななく見える彼ら農民の暮しこそ、開発と全面的に対峙しているものだと思うのだ。まるで大地に根をおろしたかのような彼らの暮し、そんな暮しの確かさや重さの中にこそ、いま私たちが学ばなければならぬものがあるのではないのか。決してマスコミの紙誌面を飾ることのないそんな彼らの暮しこそ、私にとっては伝え記録する価値のあるものだと思う。

『ごえん玉』 って何だ

五円玉が廃止されるという。もう「カネ」としての意味がないからだそう。だが、廃止されるのは通貨としての役割だけではない。五円玉の図柄(稲と歯車)そのものが廃止されるということだ。労働の価値を象徴するような通貨が許されない世の中になりつつあるということだ。私たちは、工業と農業の違いはあっても働く者の生活と権利を守りたいと思う。たかが五円玉であっても、「稲と歯車」が示す精神を捨ててはならないと思う。もう一つ、「ごえん」は「御縁」に通ずる。労働者同士の御縁、つまり団結を意味する言葉でもある。

この世の中でひとりひとり切り離され、仲間にも心を閉ざしている労働者の、本当の胸の内を聞き、表現していきたい。誰でも本当は仲間がほしいのだ。

「ごえん玉」は、このような趣旨で、仕事のこと、暮しのこと、何でもいから皆に知ってもらいたいことを書いてもらいたい。みんなのことばで表現し、心を開きあえるような場にしたい。

よろしく頼む。

ごえんだま

— 下層・下請労働者の生活と意見 —



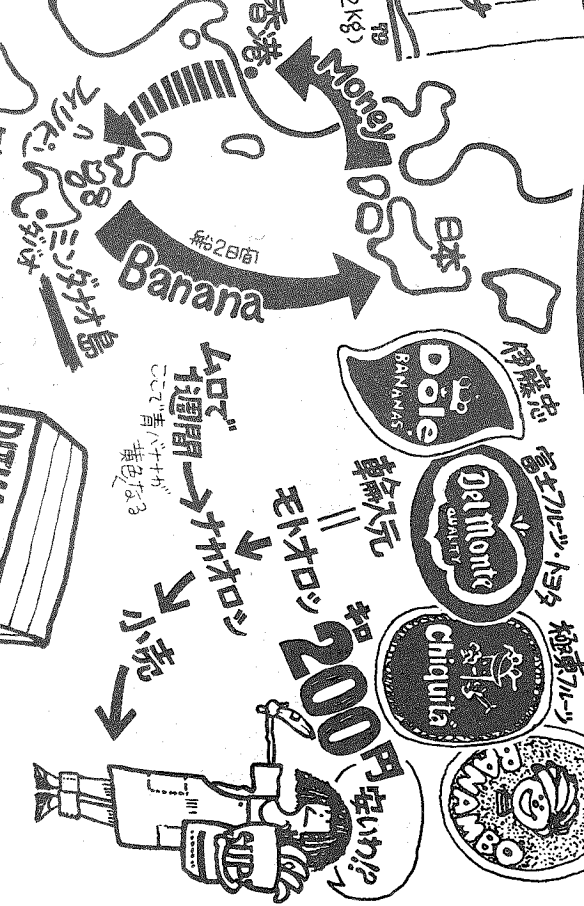
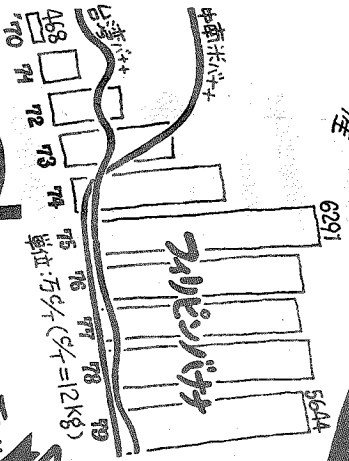
『ごえん玉』編集委員会

立川市曙町2-30-10メイゾン立川203

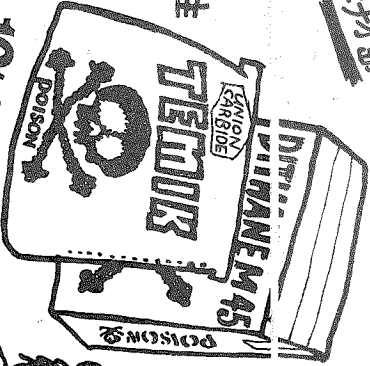
三多摩自治研究会発行

日本の市場に出回る
バナナの8割は
フィリピン産

バナナ食民世 フィリピンバナナと私たち



船積
箱入貼
選差
汎差
計量
作業場
知入れ



ユル
ユル
ユル

1kg 2円50銭

フィリピン日記

福山敦夫

先日は黒テントのメンバー九名と一緒に四月二十二日から五月二十日まで、フィリピンへ行ってきた。

今回の目的は、PETA（フィリピン教育演劇協会）の招きによる黒テントの公演と、PETAの主催するワークショップに、黒テントのメンバーが参加することであった。私自身は、彼らの演劇の音楽を担当することと更に、水牛楽団等で歌われている歌を、そこで紹介することが目的であった。

私が歌う歌は、すべてタガログ語に訳されて、タガログ語による朗読のあと歌うというふうにやった。曲目は、チリの「不屈の民」「農民への祈り」タイの「人と水牛」韓国の「その日が来る」三里塚から「茶つみうた」「管制塔のうた」フィリピンは「祖国」という具

合で、最初の二日ほどはアガツてしまったり、野外のため風で譜面が見えなくなったり、照明係が気を利かして明かしてくれてくれたために、まぶしくて譜面が見えなくなったりで、うまくゆかなかった。

我々の出演した場所は、マニラ市内のパシグ河に面しているフォート・サンティアゴ公園の奥にある舞台。要塞（フォート）跡であり、日本の統治下の時は監獄だったところで、多くのフィリピン人を殺害した所だと、PETAのメンバーが説明してくれた。その監獄だった場所は、分厚い石の壁でできていて、大した改造もせず素晴らしい野外劇場として使われているのである。

ここで我々は八回の公演を行ったが、うち一回は雨のため中止した。中止を客につたえ



たころから雨が上がり素晴らしい星空になってしまったので、歌だけ予定通り演奏した。歌の伴奏は、黒テントの服部良次にピアノをやってもらい、私のギターの弾き歌いというのが毎晩のやりかただった。

客の入りは当初非常に悪く、だいたい二、三十人位だったが、終りの二、三回目位に、

も熱い拍手に支えられて、気持ちよく歌えた。実際にやりがいのある仕事だった。しかしどうして日本の時はこういうふうにならないうまいかないのだろうか。それと「祖国」という歌だがこの歌はどんな人々の間でも実によく知られていた。このように人民の解放を歌った歌がいつも好んで人々の間で歌われているというのは、本当に素晴らしいことで羨やましい限りだ。事実この歌を最後にタガログ語でやれば、確実にうけてしまう。だけど、三十数年前に、日本軍によって多くのフィリピン人が殺された場所で、私たちがその多くの霊にかこまれた中で公演をやるということは、何か複雑な気持ちである。

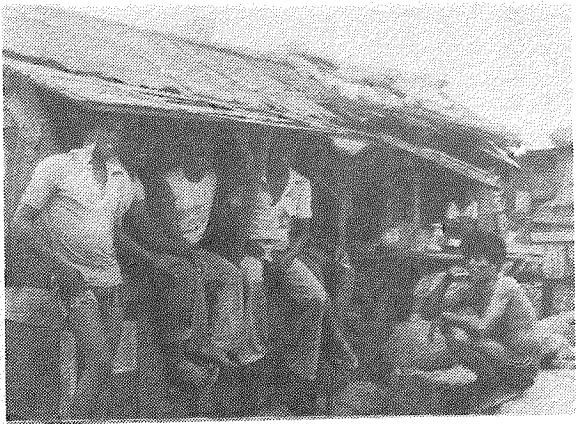
四月二十四日

夕方、PETAのカリナガン・アンサンブル（PETAの専門的俳優集団）による本公演が、フォート・サンティアゴであるというので出かける。「カスプリン」という実在した人の芝居で、フィリピンのチャペリー・チャップリンといわれた人だ。アメリカから輸入されたスタイルの「ステージ・ショー」という歌・踊り・コミカルな寸劇・手品などというバラエティ・ショーで活躍した人で、晩年

は仕事もなく、トンドのラムで酒びたりの生活をするようになり、昨年暮れになくなった。芝居は、彼がチャップリンにあこがれ、成功し零落して行く過程を描きながら、それがそのままフィリピンの現代史を浮かびあがらせるという筋のようであった。全体には、ショー的な要素に力を入れすぎて、テーマがよくわからなくなってしまうという印象を受けた。もつともタガログ語で上演されているのでよくわからない。でも踊り、歌が上手だった。

それともう一つ、PETAの重要な活動であるワーク・ショップで行われた、五つのクラス別の試演会は、どれも非常にわかりやすくおもしろかった。たとえば、平和な漁村のくらしにある日突然大きな漁船があらわれ、魚を根こそぎとって行ってしまふ。漁民たちが抗議すると発砲しておどし、そのうちの一人が漁師の一人にあたり死んでしまふ。漁村では集会がもたれ、討論のすえにみんなであちあがり戦いにむかう、といった具合であった。どれも具体的に真実を語っていると思つた。

これに参加しているメンバーは、タイ、マレーシア、インドネシア、日本、フィリピン



やつと九割の入りになったようだった。三里塚の歌の前に説明を簡単にするのだが、いつも大きな拍手がおこり、勇気づけられる。実際戒厳令下のマニラ市内で、こういう歌を、しかも私のような日本人が歌うということは一体どういう反応をうけるのだろうかと内心心配をしたが、事実は実にやわらかな、しか



こちらの竹は目があらく、楽器によって向き不向きがあるようだ。竹筒マリンバ、シーク、竹ボラ、ケーナ、横笛、鳴子、コロンである。最後のコロンというのは勝手につけた名前前で、これは他の楽器を作っていて発見したもので、実によい音が出るのだ。これは日本に帰って特許をとろうかと冗談で話したが、おもしろい楽器である。詳細は後日。

竹製のこれらの楽器は、実はフィリピンのルソン島北部、カリンガ族の楽器にすべて同じものがあり、むしろ種類も豊富である。先日、フィリピン大学へ、ホセ・マセダ教授に会いに行った時（彼は西ドイツに行っていて会えなかったが）彼の研究室にこれらの楽器が収集され、またいくつかは彼が作ったものであったが、実にさまざまな楽器があった。

の人々で日本、インドネシアはほとんどが専門家にちかい人たちで、タイ、マレーシアは学生およびソーシャル・ワーカーたちである。

四月三十日

芝居に使う楽器を作る。
すべてフィリピンの竹を使って作ったが、

鼻笛や琵琶、琴、堅琴、舟型の木琴、さらに口琴や胡弓など、北部、南部では大分違いがあるが、実に多様である。PETAのメンバーがめずらしそうに見ていたが、思えば変な話ではあるが、わからないこともない。

五月二日
芝居の音楽をやるのに手伝ってくれる人をPETAに頼んであったのだが、今日その一人が来た。ノエル・サントウイルという男でテレビ局のディレクターであり、PETAのカリナンガン・アンサンブル（これは専門の俳優たちの集団である）のメンバーでもある三十才位の男だ。日本の太鼓やら、フライパン（五つのフライパンを叩く）、鈴、それに先日作った竹楽器を彼と二人で分担して、劇音楽をやるのだが、ギターが専門らしく、他は苦手そうなので簡単なものをやってもらおうことにする。

五月八日

今日から黒テントの公演が始まる。十一日まで四回やって三日休み、十五日からまた四回やって終わるといふ予定だ。

フィリピン国歌斉唱が始まり、黒テントの紹介、タガログ語の解説がところどころに入るやり方で、一部「西遊記」をやり、休憩の前に私が数曲歌い、休憩の後「極楽金魚」をやるといった具合だ。客の入りはバラバラ。反応もよくわからないといった感じ。

五月十一日

今日から、私だけASI（アジア社会事業学校）に宿泊所を移る。というのは、集団でいるのにそろそろ私は堪えられなくなってきたのと、ASIにはフィリピン各地からと、アジア各国から、ソーシャル・ワーカー（社会事業家）の勉強に来ている学生たちと一緒に生活できるという魅力があるからだ。それに、公演は既に始まっているから、練習に付き合うことも要らないわけだ。

実際ASIに移った時は、それだけである種の解放感を味わった。人々は親切で、すごく暖かく私を迎えてくれたし、とても家庭的で何ともいえない気分になった。

ここにいる中国系マレーシアの林青（リンチン）という若い女性が私を農村やスラムへ案内してくれた。私は実際、農地やスラムに入ってきた。彼女は実習のためによく行くので、いろいろな所に詳しいのだ。

五月十二日

最初に行ったのが、マニラからバスで二時間程南のカヴィテ州のダスマリニヤス・A地区の教会で、この神父さん宛に紹介状を書

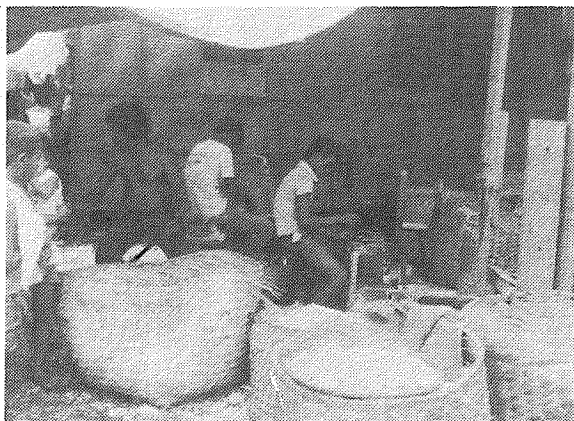
いてもらい、独りで訪ねていった。

この地域は、A地区、B地区、C地区というふうに分かれていて、更にそれぞれが、1区、2区、3区と分かれている。たとえば、A地区では、1区と3区が住宅区域、2区は洗濯工場となっている。

住宅といってもバラック小屋がほとんどで板を張り合わせただけの家から、ブロックを積み上げた家とかで、井戸は共同のものが数ヶ所にあるだけ、サリサリストア（雑貨屋）が二・三軒ある。都市のスラムより密集した感じはないが、庭があるといったふうでももちろんない。でも路地には子供たちがいっぱいいて、にぎやかで、なごやかな、実にあったかい、やさしい雰囲気をもっている。

近くの工場で働けるのはわずかな人々で、一日当り十五、六ペソ、あとはマニラとか、近くの町へ、日雇いに出かけるしかない。まわりには広大な土地があるのだが、政府の土地で、政府は工場用地として管理しているのだ、荒れたままになっている。このA地区の人々は、五年前からマニラから移住してきた人達である。マニラからスラムをなくそうとする政策だと聞いた。

大体一つの地区には二千四百から五百位の



家族が住んでいるという話だ。なかの一軒の家に神父さんとあがり込んで、お茶をご馳走になりながら話す。御主人は船員でイギリスに行ってるそう。息子さん二人はバンドをやっているという話である。日本にも時々来るそうである。でもこの家は、まだいいほうなの

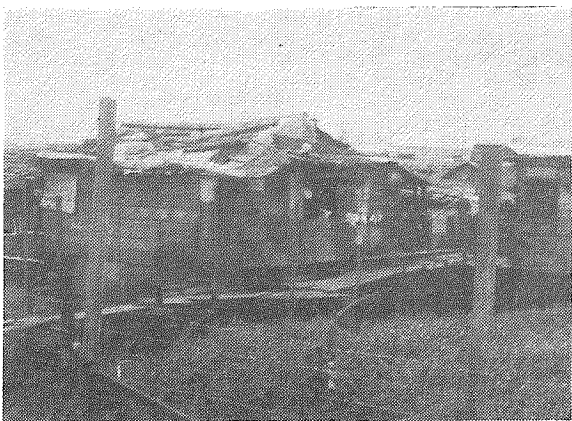
だろうと思う。しかしここ数年のインフレはものすごくどうにもならないというふうにこぼしていた。全くこの政府は馬鹿な政府でね」といつて神父をチラッと見て笑ったが「それは私達も同じです」というと「おやまあ、あんたたちもかい」といつて笑った。

話は米の話になって、教会で馳走になった炊きたてのご飯は実においしかったけど、我々が普通食べる飯というのは古米ばかりで普通米がキロ当たり三百円以上（十ペソ）するというと、びつくりしてたが、日本の物価と我々の生活費等、とても信じられないという風であった。こっちの米の値段を聞いたのだけど、ちょっと今、残念だが思い出せない。教会へ戻って夕食後、歌を歌えというので三里塚の歌や、チリ、タイの歌を歌う。神父たちもフィリピンの民衆の歌を聞かせてくれた。

五月十三日

八時にノックの音で目が覚める。朝食後、今度はC地区へ行く。ここの住民は3年前からの移住者達だそう。約二千四百家族で、皆仕事がないので、若者も家の囲りでブラブラして居るしかないといった風情である。

又、一軒のサリサリストアをやっている家



を訪問する。とにかく神父と一緒に、実に愛想よく日本人を受け容れてくれる。この家で昼食をご馳走になる。ヤリイカのしょう油煮、ニガウリと芝海老の煮物、豚肉を豚の血で煮こんだシチュエ、それに焼豚風の料理とスープ、デザートにマンゴー、スイカである。突然の訪問にかかわらず、こんなもてなしを

受けて恐縮したが、これには実際びつくりした。とにかくこれもこれも典型的なフィリピン料理だが、実にうまい。

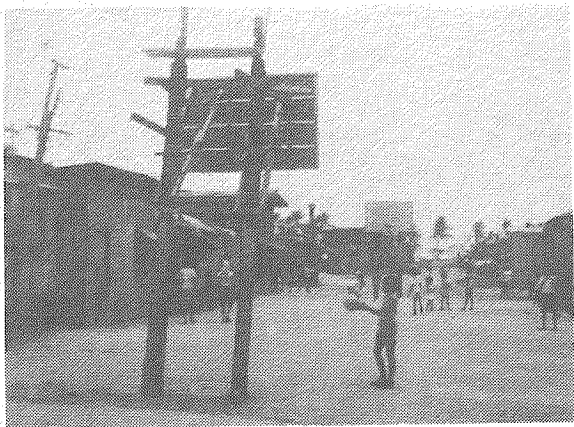
この家は又特別である。隣近所というに及ばず貧しく食べる物さえもないというのが普通で、体力を使わないうように、じつと横になつたままで起きてこない。実際神父が声を掛けても返事はなかった。何だか、だんだん複雑な味が口の中にひろがってきていた。

二時頃のバスで神父さんと一緒にマニラへ戻る。

ASIへ着いてシャワーを浴び横になるとウトウト寝てしまった。

五時頃、頭をポンポン叩いて呼ぶ人がいるので目が覚める。林青青女史である。五時からスライド・ショウがあるので来ないかというのだ。ASIでは毎日五時からスライド・ショウをやっている。今日はトンドとミンダオオのスライドだ。そういえば、三月に川崎の石の会で見たフィリピンのスライドもここからの物でないだろうかと思う。北部ルソンのチコ河ダムの話と同じ、ミンダオオのダム建設に反対するモロ族の人達のスライドである。それは、モロ族の人達の生活は、大

地と水と自然に適應するやり方で支えられているのであり、そのどれも欠けては成り立たないということと、ダムは工場（資本）と都市生活者のものでしかないことを訴えていた。即ちダム建設はモロ族の人々の死を意味するということだ。トンドのスライドは、劣悪の生活条件に対して早急な救済が必要であることを写していた。



五月十四日

朝食後、ASIのメンバー三人と一緒に、トンドへ行く。彼らは時折、トンドへ行き、コミュニティのリーダー達と話し、写真を取ってレポートするのだそう。

ジーブニーでトンドの入口まで行く。中へ入って行くと下水道がないせいなのか地面が水びたしになっていて、悪臭が漂よう。奥へ入って行きZOTO（トンド第1区組合）の事務所を訪ねる。そこで訪問者の署名を頼まれ、名簿を見てびつくりした。とにかく日本人ばかりなのだ。それも団体でたくさん来ているのが解った。

私は何だか、マニラの名所めぐりの観光客に自分が思えてきて、署名するのは気がひけたが、しかし、実際それと何も変わらないのだと思ひ直し、十ペソ払いパンフレットをもらい、署名をした。

各コミュニティのリーダーを見つけインタビューを試みようと思はれ人を訪ねたが、不在らしく誰にも会えないようだった。路地を抜けてしばらくすると、金網があり、その外には、ポツンポツンと、バラックが建っている。どうもこの金網の外と内とは、全く感



じが違っているのだ。子供たちが水浴びをして居るので近くに行つて見た。すると、彼らの顔見知りの人々がつぎつぎに集まって来た。子供を抱いた婦人や年寄りたちそれに混じつて、コミュニティのリーダーがいた。話を聞くと、この二日程前に白昼、暴力団のような連中に襲撃を受け、家もバラックの診療所

も壊されてしまったということだった。壊すだけでなく、その材木もトラックで持って行ってしまおうので、仕方なく知り合いの家に居候しているのだと聞いていた。政府はここに大きな新しい国際港を建設する計画なのだそう。これはまるで、二里塚じゃないか。

母親に抱かれた子供は、熱でぐったりしている。風邪をひいているそうだが医者にかかれぬ。一回医者に診てもらおうと百ペソである。残念だが持ち合わせがないし、どうにもならない。どうすりゃいいんだ。台風が来ている。この子は金さえありや、葉さえありや治るんだ。

私はただただ怒るしかなかった。

しかし、確実にここでは組織づくりが進んでいるようだ。リーダーが何日後かに大きな集会をやるというていた。

私にはタガログ語なので（英語も怪しいもんだが）よくは解らないが、この人々の怒りが激しいことは充分に感じられた。私は覚えてたのタガログ語で、精一杯激励をするほかなかった。

ママヤング・ナグカカイサ・アイ・ヒン
デイ・マササコップ（団結した人民は決して打ち破れない）

編集後記

タイの革命詩人ジット・プミサクのしごとを紹介することは「水牛新聞」時代からの課題でした。天野和子さんの協力で、ひさしぶりに再開することができました。「水牛」の出发点となったのも、かれの「生きるための芸術」のかがんがえ方です。かれの友人であったトンバイ・トンパヴさんは、バンコクの軍事法廷で学生指導者「バンコク18人」の解放をもちとった弁護士であり、タイ・ジャーナリスト協会の会長であり、作家です。7月には鹿砦社の招きで来日する予定です。

日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ美術家会議は7月11日から20日まで東京都美術館でアジア芸術祭をひらきます。パレスチナとタイの現代美術が展示され、「水牛」をはじめるきっかけをつくらした劇「みにくいJASEAN」の作者テープシリ・スークソバさんも参加します。20日（日）には「水牛」もくわわってイヴェント「アジアとわれわれの午後」をひらきます。映画、スライド、物語劇、音楽をやります。1時から5時まで。前売券五〇〇円は「水牛」編集部にあります。

購読の御案内

*本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

*申し込みと送金は郵便振替（口座名水牛編集委員会、口座番号東京四一九一七九二）または現金書留でお願いいたします。住所、氏名、電話番号、何号からということを明記してください。

*購読料は送料とも一年分三〇〇〇円、半年分一八〇〇円です。

水牛通信 第二巻第七号

一九八〇年七月十日発行

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-13

八巻方

電話〇三（四二五）九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 (株)トライプリントショップ